フランス世紀末文学叢書 VII

仮面物語集

ジャン・ロラン

小浜俊郎 訳

国書刊行会

フランス世紀末文学叢書⑦
仮面物語集
定価　二三〇〇円
一九八四年三月一五日　初版第一刷印刷
一九八四年三月二〇日　初版第一刷発行
訳　者　小浜俊郎
発行者　佐藤今朝夫
発行所　株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八
電話〇三（九一七）八二八七　振替東京五―六五二〇九
印　刷　セイユウ写真印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社

Jean Lorrain
Histoires de masques

仮面物語集

ジャン・ロラン
小浜俊郎 訳

国書刊行会

口絵選定＝澁澤龍彦
装　　幀＝山下昌也

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

仮面物語集
仮面の孤独……一一
仮面の女の家では……一九
学生の物語……二七
仮面……三四
幻燈機械……四二
エーテル吸飲者の物語
未知の犯罪……五三
神経衰弱患者の原稿
Ⅰ　水の都の時間……六五
Ⅱ　水の都の時間……七二
Ⅲ　仮面トリオ……七九
エーテル吸飲者の物語
仮面の穴……九一
画家の物語

腕輪の男……一〇三
音楽家の物語
ジャニーヌ……一一五
不可解なアリバイ……一二四
止めの一撃……一三三
パリの仮面たち
Ⅰ　肖像画に描かれた貴婦人……一四五
Ⅱ　葵色の背広を着た男……一四九
Ⅲ　葬儀女……一五三
Ⅳ　巻形ウェハースを売る女……一五七
通り魔……一六五
地方の仮面たち
ダジュランクール氏……一七一
Ⅰ　ゴルジビュ夫人……一七八
Ⅱ　善良なギュデュルの話……一八六

Ⅲ　マリトルヌ女王……一九三
デュメルサン夫人
Ⅰ　ある女性……二〇一
Ⅱ　ある魂……二〇八
Ⅲ　亡霊たちの通夜……二一五
訳者後記……二三三

口絵　ジェイムズ・アンソール《スキャンダラスな仮面》

仮面物語集

仮面物語集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

仮面の孤独

仮面が所有しているあの人を魅惑し反発させる不可思議な力、その巧みな技術を解明したり、それを惹き起こすいくつかの動機を説明したりすることを、また何人かの人間が一定の日に顔を限取って仮装し、同一性を変え自分の存在を止め、要するに自己自身から逃亡するという止むに止まれぬ欲求に負けてしまうことを、いったいだれが論理的に証明できるだろうか？

厚紙で作られた偽物の顎と鼻をどぎつい色彩で塗りたくり、偽物の鬚を生やし、黒い繻子の布で半仮面あるいは目と鼻のところに穴を開けた頭巾を光らせたりする者は、いったいどんな本能や食欲の持主なのか、どんな期待や渇望に燃える魂の病人なのだろうか？　仮装舞踏会の日、これら苦悩する醜怪なドミノ仮装衣と告解者服の群は、どれほど大麻（アッシッシュ）とモルフィネに酔い、自己自身を忘却し、どのような胡散くさい邪悪な色事に没頭しているのだろうか？

この仮面の人たちは、騒々しくもあり動作と身振りが活発だが、陽気さには物悲しいところが混じり、生者というよりは亡霊に似ている。多くの者はあたかも亡霊のように、長い襞の付いた衣裳

を身にまとって歩むが、顔も形も見えない。こうなると、びろうどや絹で固めた顔を囲みつつ、鎖帷子頭巾をかぶる吸血鬼が存在しても当然ではなかろうか？　ごつごつした脛骨と上膊骨の鋭角を屍衣の流儀で被いつつ、あのだぶだぶの道化の上っ張りを着た、空漠と虚無が存在しても当然ではなかろうか？　群衆に溶けこむため身を隠すこの人種は、すでに自然に背き掟から外れているのではなかろうか？　この人種が明らかに有害なのは、匿名で悪意を持ちつづけたいと望み、そのうえ空想倒れで、本能だけを動かそうと努めるためだ。しかも冷淡で陰気でありながら、雑沓と身振りと喚声で、大通りの臆病で茫然とした気分を奮い立たせ、女たちを甘美な心でぞくぞくさせ、子供らに引きつけを起こして卒倒させ、性別も分らぬ仮装の者を眼の前にした男たちを下劣な心にするが、突然不安に陥れもする。

仮面、それこそ未知なる人の曖昧な心かき乱す顔、そして虚偽の微笑であり、恐怖させつつ堕落せしめる背徳の魂そのものでもある。それはまた懸念が所有する薬味の利いた欲情であり、「彼女は醜いのか老けているのか？　彼は美しいのか若いのか？」と、好奇心に富む感覚に投げ与えられた、あの心悩ませつつも表現を絶するほど魅惑的な挑戦でもある。これはまた、下品な皮肉と血への悪趣味が、不吉で刺激の強い味つけで色好みを示すことにもひとしい。なぜなら恋の戯れがどの家で終りを告げるかといえば、背の高い浮かれ女が泊る安宿かホテルの一室か、おそらく県庁所在の街だろうからである。また強盗どもも犯罪をおかす目的で、その場所に姿を潜めるのだし、煽動する身の毛もよだつ二重人格者と手を組んで、仮面の人たちが活躍するのは墓場に似た危険な場所

だからである。彼らの内には追い剝ぎと娼婦と幽霊が存在している。

今まで語ったこと、これこそ私見であるが、仮面が与える、少しばかり圧迫し意気を沮喪させる印象にほかならない。さてこれはなるほど一個人の感情ではあるが、しかし、これら仮面の一個の魂、すなわち絹とボール紙で作製されたこれら神秘的な一存在が、過去あるいは現在の瞬間に孤立した仮面のひとつと化して、とりわけ仮装舞踏会の夜、通行人らのひやかしを浴びてあちらこちらの歩道を震えながらさまよう惨めな姿こそ、まさに私たちが識りたくてうずうずするものではあるまいか。そして大衆の喜びに溶け込めず、零度以下の寒い夜に大きな都をさまよう不安な負け犬たち、これら途方に暮れた者たち、陽が昇ると消える白熱燈や電気燈の薄い明りに照らされつつ生まれたであろう夜の操り人形たちのひとりである彼が、なぜこんな衣裳をまとい秘密な姿でいるのか、という理由も。

約十年ほど前に私は、舞踏会の夜に現われるこのような仮面の群や無名の不可思議な人物たちのひとりに出会ったことがあるが、あの夜のことを思いめぐらしてみると、道連れに悲壮で偉大な姿を恵んでくれたのは、当時の状況のなせる業なのだ。私にとってこの変装の男こそ、名前を持たぬ神秘と予感された謎の生きた象徴である仮面であり、典型的仮面にほかならない。

私はその冬にはパリの近郊で目立たない暮しをしていた。手間のかかる綿密な仕事にけりをつけなければならなかった。それに加えて、健康上また経済的の理由によるが、一時(とき)ではあるが繁華街から離れる決意を固めていたのである。仕事が溜るとリシュリュー通りやサン＝ラザール街へよく

呼び出されるため、西部の連絡線が通じるパリ郊外の一角を選び、トリエルとポワシーの間にある小さな村で、その頃はかなりひっそりと冬籠りをしていた。

その年は二月二十五日が肉食の許される土曜日に当った。或る新聞社と用件をまとめることおよび夕食への招待が重なり、私はパリに足を運んだのである。オペラ座では舞踏会が催され、綿雪の舞う空の下を、仮面やドミノ仮面の群が一定の間隔を置いて、ガルニエ館の階段を上るのをゆっくりと眺めていた。たとえば一分ごとに辻馬車や箱馬車から下りて、ビヤホールそしてカフェを前にしたときのと同じ数で、劇場の列柱の間を彼らは通り抜けていた。そのつぎにはピエロや僧衣の者を引き廻す人たちが、騎馬の警官に守られる広場に押し寄せてきたが、彼らは巡査の存在をものともせず、馬車の交通に割り当てられた広い空間を跳びまわり輪舞(ロンド)の輪を作るのだった。ところがその夜は街の上に気狂いじみた風が法外に吹きまくっていたので、私自身も楽しんで面白がったあげく、終列車の時間を忘れはて、真夜中を半刻過ぎた頃にも、まだカフェの屋外の机で腰を掛けていたのである。午前二時前でもう列車は終りだが、私がいとも朗らかに夜を明かす決心をしたのには理由があった。大通りにはまだ物見高い人びとが群がり、仮装の者が溢れるビヤホールには喚声と嘲笑(ラチ)いが鳴り響いていたからである。だが一時近くになると、街路と夜開く店には人の気配が消え、仮衣裳の人は舞踏会へ遊歩客は家へと帰っていった。もう活気と雑沓は劇がはねた後の夜食の時刻でないと再び勢いを盛りかえさないだろう。大部分の店は戸を閉め、絶えず厚く降りしきる雪の中を私はかなり陰気な心で立ち上って駅へ向った。

その夜にはエダンでも舞踏会があったし、ブドゥロー通りの邸の照らし出された正面からは、物凄い乱痴気騒ぎの音が、立ち昇ってはうなり声をあげ低くなっていった。遠くの方では笛が聞えたが、あれはオペラ座から湧く端正なワルツにほかならなかった。オーベール街はすでに真暗だった。私の前を、アラビアのたっぷりした外套で身をくるみ、頭巾を奥深くかぶった仮面の男が歩いていたけれども、彼は明らかにエダンへ向っていた。

この仮面に生気がなかったのは、この外套と頭巾、つまり寄せ集めの衣裳の支離滅裂ぶりが、土壇場になって引き出しを掻きまわし思いにまかせて作りあげた仮装であることを充分に示しているからだ。とはいえ私は本能的に彼の姿を見まもった。しかし、エダン邸の鮮やかな照明の中で一度彼は立ち止まったが、家へ入らずに躊躇し、溶けた雪を足で踏み固め、歩道を大股で歩いたあげく、最後にオペラ座の方角へオーベール通りを戻っていった。

とはいうものの私は彼をずっと見守っていた。黒い頭巾と思い違いをしていたのは、緑のびろうどで作られて僧侶の用いる鎖帷子製頭巾だったし、しかも卵形の頭巾の下で金属のように光る織物、つまり眼の場所に穴の開いた銀羅紗の仮面が奇妙な様子で輝いていた。

「決心がどうしてもつかない者がやはりひとりいるな。」と私自身も考えた。

だが私は自分の道を歩き続けた。

ローム駅の構内に到着し、隣りのビヤホールで最後の果実酒を一飲みしてから、私は階段を上って待合室に入った。私は驚いてふるえあがった。つまりあの白い絹のようにゆったりした外套をま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com